



営農NEWS



本県で昨年、発生が確認されたサツマイモ基腐病について、県内への再侵入を阻止し、早期発見により発生拡大を防止することが今後とも重要です

サツマイモ基腐病は病原がカビによる病害で、保菌した種芋や苗、発病した被害残渣などによって伝染します。茨城県では昨年、潜在汚染苗の侵入が確認され、汚染苗の追跡調査により既に抜き取り処理が行われました。

基腐病の発病先進地である鹿児島県などでは、本病の影響でサツマイモ収量が大幅に減収し、激発した農家では転作や離農という報道もされるなど大きな問題になっています。このため、生食用サツマイモ主要生産県である茨城県への本病の侵入を阻止する対策や、侵入した場合には早期に発見して発病を拡大させないよう体制づくりを、生産現場と行政が一体となって警戒を強め、生産者に呼びかけています。

1. 基腐病の侵入阻止対策

サツマイモ基腐病を持ち込まず、発生させないためには、県外の発生地域から種芋や苗を、本県に持ち込まないことが最も重要です。また、発生地域から持ち込まれたコンテナなどは洗浄、消毒し、作物の残渣や土などを農地などに持ち込まないようにしてください。これは、サツマイモ生産者や流通業者など農業関係者ばかりではなく、家庭菜園などでサツマイモを栽培する場合でも病害が侵入する可能性がありますので、ネット通販などで種芋や苗などを県外から持ち込まないよう一般県民にも呼びかけています。

2. 苗床や本圃で、疑わしい症状がみられたら、お近くの農業改良普及センターに連絡してください。

- 1) 本病の病徴としては、育苗中では苗基部の黒変、地上部の葉巻や萎縮症状が生じます。本圃では地際茎の黒変、茎葉の黄変やしおれ症状を生じて地上茎葉の繁茂が不良となり、発病が激しいと地上部が枯死します。感染したイモ（塊根）は成り首から腐敗し乾燥すると固くなります。また、貯蔵中のイモでも、感染していると成り首から腐敗症状が進みます。
- 2) 本病と類似する主な病害に、本県では既につる割病と立枯病の発生があります。つる割病はカビのフザリウム菌が病原で、種芋や苗および発病した被害残渣で土壌伝染し、育苗中の苗や本圃で発病すると株のしおれ、茎葉の黄化、一部つるの割れ、株の枯死を発生します。また、立枯病は病原が放線菌の一種で、主に土壌伝染し、本圃へ定植（挿苗）した苗が生育初期から黄変して茎が黒変し、生育中でも地上茎葉の繁茂が不良となって茎が変色、激発すると株が枯死します。
- 3) つる割病の対策として、本県では挿し苗を主にベンレート水和剤（500～1,000倍液に30分間）等による苗の浸漬消毒が行われていますが、サツマイモ基腐病にも有効な防除対策です。
- 4) サツマイモの育苗床や本圃に定植した株の生育状況を、定期的に注意深く観察することが重要です。もし基腐病が疑われる症状を発見したら、抜き取らずに普及センターに連絡して指導を受けてください。なお、本圃での観察は、定植後に活着した株がつるを伸ばし出す頃までが症状を確認しやすく、つるが旺盛に伸び出して畝間が覆いかぶさるようになると、少ない発病株では確認しにくくなります。
- 5) 潜在汚染株が定植されて本圃で発病した場合は、発病株の病部に多数の胞子を形成して、これが風雨や圃場の停滞水で拡散し、周辺株に感染していきます。このため事前に、圃場の排水対策を行っておくことも重要になります。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。